

大学での学び 「学問する」＝「意味づける」の練習

—BLUE MARBLE English Communication を活用した essay 指導例—

今瀬 辰郎

1. はじめに：学習指導要領が目標とする「深い学び」

「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説【外国語編 英語編】第1章 第1節 改訂の経緯及び基本方針」によると、高校では「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の実現が目標であるとされている。「主体的な学び」「対話的な学び」は比較的わかりやすく指導しやすいが、「深い学び」とはどのようなものだろうか。前述の「高等学校学習指導要領解説」では、「深い学びの鍵として『見方・考え方』を働かせることが重要になること」、そして「各教科等の『見方・考え方』は、『どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか』というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方である」と述べられている。では、「深い学び」とは一体どのように指導すればよいのだろうか。今回は、生成AIの進化により、知識の習得や情報収集が格段に効率的かつ容易になった現代における「深い学び」の実現にあたり、数研出版株式会社の教科書 *BLUE MARBLE English Communication I・II* を活用したアプローチ方法を紹介したい。

2. 大学での学び 「学問する」とは

Speaking・Writing の言語活動や Reading・Listening での理解において「パラフレーズ」がキーワードの1つであることは言うまでもない。しかしながら、なぜ「パラフレーズ」、すなわち言い換え表現を理解し使いこなすことが重要であるのか、が語られることはあまりない。とりわけ Reading や Listening の理解度を測るテストにおいては、選択肢はほぼすべてパラフレーズとなるが、これらは生徒をかく乱するための仕掛けではない。

では、なぜ言い換え表現を習得することが重要であるかという点、「解釈をし、それを発表するため

には言い換え表現が必要であるからだ」と私は考える。

「解釈」は、大学での学びにおいて重要なことである。三省堂『大辞林』によると、「解釈」には「語句や物事などの意味・内容を理解し、説明すること。解き明かすこと」のほか、「物事や行為などを判断し理解すること」という意味がある(「善意に解釈する」など)。大学で学問に励み研究論文を書くということは、物事に自分なりの見方で意味を付与し、論拠をもってその価値を示すことであり、(文系理系を問わず)研究結果に対する考察をすること、発生した事象に対して意味を付与することである。つまり、大学での学びとは「解釈」をすることであり、だからこそ、自分の「解釈(=自分なりに考え、自分にとっての意味を定めた結果)」を表現するために、言い換え表現を理解し使いこなすことが重要になる、と私は考える。

3. 約20年前に留学先で受けた授業

私が大学で「学問する」ということについて多少なりとも理解したきっかけは、アメリカ合衆国の University of Wisconsin-Madison に交換留学した経験にある。当時推定年齢30歳代の准教授によるアメリカ史の第一回目の授業は、1つの問いかけから始まった。その質問とは、「自由の女神はアメリカにとって何の象徴であるか、どのような意味をもつか」であった。大教室に集った約120名の学生の何名かが即座に挙手をし、「自由の象徴」をはじめとして矢継ぎ早に約15種類の意見を発表した。学生たちは彼らなりに、自由の女神を意味づけ、理由とともに意見を発表した。教授は全ての回答を称賛し、「それらに象徴されるアメリカ合衆国がどのような経緯で今日まで発展してきたかをこの授業で学ぶのだ」と宣言して、半年間の授業を展開していた。唯一の解答や定型の解答が存在するという日

本の教育に慣れ親しんだ私にとっては、この光景は衝撃であった。アメリカの大学の歴史学の授業においては、日本の高校の歴史の授業で求められたような大量の正確な知識や、教授の見解を正確に理解することに焦点が当てられるのではなく、史実を解釈して歴史上の意味づけを行うことが重要であった。学生は教授の意見を覚えたり信じたりする必要はなく、週1回の議論の時間には、論拠をもって自分なりの解釈を構築し、積極的に意見を発表することが奨励された。

この授業の定期考査が印象的だった。Home-taking Exam と呼ばれており、要するにレポート提出である。しかしながら、日本の大学のレポートの提出とは大きく異なるものであった。教授から課されたテーマに対して、定められた語数以内で essay を書き、主張を支える論理の一貫性が評価された。4～7冊の指定教科書から主張の論拠となる史実を拾い上げ、主張を支持できるように論理を構築する。どのような主張であれ、essay の論理が成立しており、指定教科書にある史実との一貫性があれば、優れた評価を受けることができた。実際に取り組んでみると、数冊の専門書を読み込んで、その内容と矛盾しないように、論拠となる史実を提示して essay を書き上げる作業は困難を極めた。

essay を書き上げる作業自体も大変だったが、2本の essay の提出期限がテーマ発表の2日後というのも非常に厳しかった。履修していた授業は体育を含めて4科目であり、学術的な教科3科目を履修するのはアメリカの大学では平均的だったと記憶しているが、アメリカ出身の学生でさえ、歴史学の Home-taking Exam を2科目履修すると大変なことになるため、同時に2科目以上は履修しないと決まっていた。定期考査の期間は、24時間開放の図書館に深夜まで多くの学生が残っていたし、私は留学した2学期とも、Home-taking Exam に取り組む2日間は徹夜であった。後期(春学期)の授業では、私は Home-taking Exam の授業が歴史学と社会学で2つとなった。テスト期間ずっと夜を徹して一心不乱に essay を執筆したが、最後には期限の延長を教授に懇願することになった。交換留学生の身で英語力が不十分だからという言い訳で半日待ってもらわないとやりきれず、非常に悔しい思いをしたのであった。

この留学先での経験を通じて、essay によって意見を主張し、論拠をもって読者を説得するという、欧米型の教育の一端に触れたと感じた。「物事を自分で解釈し、意味づけ、価値を創造することが学問をすることである」と自分なりに理解したきっかけとなった授業であった。帰国してからは、「学問をする」、すなわち「物事を意味づける、価値づける」ということにこだわるようになった。

教員になってからは、日本の高校生にも、知識習得や論理的思考の訓練に加え、さらに「学問する」＝「意味づける」ことを少しでも体験させたいと考えてきた。生成 AI が学習の効率化や知識習得の簡易化を進めている最近では、いよいよ新たな価値を創造する力の重要性が増してきたと感じている。次項では、具体的な essay 指導の例を挙げ、「意味づける」という活動の訓練方法を示したい。

4. *BLUE MARBLE English Communication II* Lesson 8 “The Diminutive Giant Who Fought for Refugees” を活用した指導例

BLUE MARBLE English Communication II における指導例を紹介する。Lesson 8 では、日本人初の国連難民高等弁務官になった緒方貞子さんを扱っている。緒方貞子さんは、5フィート(約150cm) 足らずと小柄ながら、語学力や交渉力を生かして精力的に活動したため、同僚から「小さな巨人」「5フィートの巨人」と称されていた。Lesson 8 のタイトルにおいては、「小さな巨人」に “Who Fought for Refugees” という補足説明が追加されている。本文では、緒方貞子さんの活動の理念と、実際に難民保護に向けて活動した事例が挙げられている。

本レッスンでの essay の指導例は、Lesson 8 を一通り読んだあとに、緒方貞子さんに「小さな巨人」に替わるニックネームを付ける essay を書かせ、本文と結び付けて論拠を2つ挙げさせてみる、という方法である。ちょうど本文において regard A as B の表現が(受動態で)登場しているので、この表現を活用して essay を書かせてみよう。リード文は以下のようにすることが可能であろう。

In Lesson 8, Ogata Sadako is called the “diminutive giant.” What would you like to call her? Or how do you regard her? You should make

an argument with two reasons. Begin with either of the following two sentences and provide two reasons based on the passage in Lesson 8.

① I would like to call Ogata Sadako “_____.”

② I regard Ogata Sadako as “_____.”

※ Write your own idea in “_____.”

このように、緒方貞子さんにニックネームを付けさせる活動を通じて、彼女の存在意義や存在価値を各生徒に意味づけさせるのである。ニックネームを付ける活動、つまり彼女の存在に意味を付与する活動は、まさに「見方・考え方」を創造する「深い学び」の活動と言えるだろう。

また重要な点は、その論拠として教科書本文から2つのエピソードを引用し、ニックネームとエピソードとの関係性を論理的に説明し、読者を説得するよう指導することである。緒方貞子さんほどのような存在であると感じたか、存在意義を一言で表現させ、その理由を論理的に説明して読み手を説得できたかを評価する。essayの形式としては、agree/disagreeに答えたり、意見を述べてその理由を自由に挙げる形式は一般的であるが、その理由を教科書などの本文から抽出し、自らの解釈について論理的に説明することはあまりないのではないだろうか。このようなessayを書く訓練をすることは、大学での論文作成、レポート提出の練習にもなるであろう。

この種の創造的な活動を苦手とする生徒もいるかもしれないため、例として“_____”に具体的なニックネームを挙げ、2つの論拠も挙げて書き方を例示すると、生徒にとっては活動がイメージしやすくなるであろう。

ただし、例を挙げると、一部の生徒は例をそのまま真似してしまう。例示したニックネームを活用する場合には論拠を異なるものにするよう指導するとよいであろう。あるいは、論拠を真似ることのないように、論拠は口頭で示す程度としてもよいかもしれない。以下は、教科書の表現をそのまま活用した例である。

提示例：I regard Ogata Sadako as a “global humanitarian leader.”

(私は、緒方貞子さんを「世界的な人道的指導者」であると見なします。)

論拠1：当時、公式な難民として扱われなかったイラクのクルド人保護のために、アメリカ大統領と多国籍軍と接触した。

論拠2：彼女自身の目で状況を見るために、紛争地域の最前線を訪れ、難民と会話をした。

このような例は、英語または創造的な活動が得意な生徒の取り組みを助けることになるであろう。

次項では、*BLUE MARBLE English Communication I*におけるessay指導の事例を紹介する。

5. *BLUE MARBLE English Communication I* Lesson 6 “Humans Evolve with Measurements”を活用した指導例

*BLUE MARBLE English Communication I*における指導例を紹介する。Lesson 6は、「測る」という行為を通じた人類の進化や、「単位」がどのようにして生まれ、どう発展を遂げたかについて扱ったレッスンである。本文では、歴史の記録では「単位」というものが15,000年以上前の旧石器時代には使われていたこと、単位や測定の方法の起源、近代的な単位の統一について触れられている。

本稿4で挙げた例と同様に、1年生の教科書では、Lesson 6の本文を一通り読んだあとに、人類にとっての「測る」という行為を自分なりに意味づけるessayを書かせ、本文と結び付けて論拠を2つ挙げさせる、という方法を提案したい。リード文は以下のようにすることが可能であろう。

In Lesson 6, the author says humans evolve with “measurements.” What do “measurements” signify for humans? Or, what do you think “measurements” mean for humans? You should make an argument with two reasons. Begin with either of the following two sentences and provide two reasons based on the passage in Lesson 6.

① “Measurements” signify “_____” for humans.

② I think “measurements” mean “_____” for humans.

※ Write your own idea in “_____.”

このように、各生徒に「測る」という行為の人類史上の意味を考えさせることで、「意味づける、価

値づける」という活動のトレーニングに取り組ませる。

やはり重要な点は、その論拠として教科書本文から2つのエピソードを引用し、付与した意味や価値とエピソードとの関係性を論理的に説明するよう指導することである。「測る」という行為は人類にとってどのようなものであると考えたか、その意義を一言で表現させ、その理由を論理的に説明して読み手を説得できたものを評価する。理由を教科書本文から抽出し論理的に説明させることが、文系理系や学部を問わず、大学での論文作成やレポート提出の練習となるだろう。

やはりこの種の創造的な活動を苦手とする生徒もいるかもしれないので、例として“_____”に具体的な意見を挙げ、2つの論拠も挙げて書き方を例示してもよい。例えば以下のような主張を例に挙げてはどうだろうか。そのまま真似をしてしまう生徒が出ないようにするには、生徒からは提案されづらい例を挙げるといっても1つの方法である。

提示例：“Measurements” signify “clarification of differences in personal property” for humans.

(「測る」という行為は、人類にとって「個々人の所有物の差の明確化」を意味する。)

論拠1：旧石器時代の人々は、それぞれの食糧をどれだけ集めたかを数えたり、記録するのに単位を使用していた。所有物の量の差が明確な数値となったと思われる。

論拠2：1500年代後半から江戸時代にかけて、「石高」は何人の兵を養えるかを示し、大名の力の差が明確になった。

このような例を挙げることが、英語やこの種の創造的な活動を苦手とする生徒に取り組ませる際の一助となるだろう。

6. まとめ

冒頭で述べたように、「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説【外国語編 英語編】第1章 第1節 改訂の経緯及び基本方針」によると、「深い学びの鍵として『見方・考え方』を働かせることが重要になる」。また、「同第3節 外国語科の目標」においては「『見方・考え方』を確かめ豊かなものとすることで、学ぶことの意味と自分の生活、人生や

社会、世界の在り方を主体的に結び付ける学びが実現され、学校で学ぶ内容が生きて働く力として育まれることになる」と述べられている。

今回紹介した、物事を意味づける、価値づける訓練は、この「深い学び」の鍵となる「見方・考え方」を働かせ、学ぶことの意味と自分の生活や社会、世界の在り方を結びつける訓練に当たるといえる。知識の量や正確さを競ったり、問題を解いて点数の優劣を競ったりという競争ではない「深い学び」を実現し、「学び」というものの「意味」を考え直す1つのきっかけとなることが期待できよう。教科書を活用したこのような訓練は「見方・考え方」を豊かにし、唯一解のない現実の世界の事柄を自分なりに意味づける、すなわち「学問する」力を育むことになるであろう。「学問する」力の成長により、実生活においては、自分の生活や社会、世界を価値あるものであると実感しながら生きていくことができ、進学先や就職先では、AIにより情報や知識の価値が陳腐化する世界においてより重要となる、創造力や問題解決能力を発揮することができるだろう。

参考文献

文部科学省(2018)。「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説【外国語編 英語編】」

(岐阜県立岐阜工業高等学校 教諭)